

# オンラインワンの魅力を生かし 沿線を潤したい



肥薩おれんじ鉄道 営業課長

かわくぼ しげのぶ

## 川窪 重伸さん

Shigenobu Kawakubo



おれんじ鉄道では、この沿線を「九州のウエストコースト」と呼んでいる。

昨年10月から肥薩おれんじ鉄道の営業課長を務める川窪重伸さんは、異業種で培った経験豊富な営業力を買われ、社長から直接スカウトされて転職。これまで、ホテル業界での国内外の営業や、鹿児島に拠点を置くサッカーのクラブチーム「ヴォルカ鹿児島」の事務局長などを経験し、日本各地や東アジアにも幅広い人脈を持つという。

「肥薩おれんじ鉄道沿線には美しい自然が残っている。この沿線を、スロートライフが楽しめる『いやしのスポット』や、そこで暮らす人々とのふれあいを体感できる『人情回帰線』というように、テーマと広報戦略をしっかりと持って売り込んでいきたい」と話す。

沿線のスポークスマンを自負する川窪さんに、肥薩おれんじ鉄道沿線の持つ魅力や営業活動などについて語っていただいた。

**肥薩おれんじ鉄道沿線の魅力とは**

入社する前は、列車を利用するというと旅ではなくビジネスだけ。もちろん車窓を楽しむ余裕などはなく、早く目的地に着いて仕事に取りかかるという感じでした。入社して初めて沿線を列車や車、そして歩いて回ってみて、本当にまだこんな素晴らしいロケーションが残っていることに率直に感動しました。日本の原風景を走っているという感じですね。美しい風景などを見たときに「ふうー」と気が抜ける瞬間ってあるじゃないですか。そういうヒーリング効果が今でもこの沿線には残っています。

例えば、景色、食べ物、温泉、人情など、都会ではもう味わえなくなつたものがここにはゴロゴロしているんです。地元の人でも気づいていないような素晴らしい環境が残っているところこそが、肥薩おれんじ鉄道沿線の最大の魅力です。

**営業活動について**

お客さまには、おれんじ鉄道を利用して沿線の観光地や温泉などを楽しんでほしい。そのために、私たちは鉄道会社であると同時に旅行会社でもなくてはなりません。我々

営業スタッフが沿線の各エリアにオンラインワンと自信を持って言えるものを見いだし、また、時には作り出し、積極的に売り込んでいかなければいけないのです。

切り口は何でもいいのです。オンラインワンのものをきつかけにして、そこからいろんな方面へ広げていければいいのですから。そういう仕掛けができるプロデューサー的な役割をしたいと思います。

ただ、これらはことは私たちだけでできるものではありません。沿線の方々にもご協力をいただき、支えてもらえるようにするにはどうすればいいのか。それには多少なりとも地元で利益が生まれないとだめだと思えます。我々の活動によって、お客さまにお越しいただき、そのお客さまを地元で受け入れてもらう。そこで初めて我々が地域に利益を提供することができたとと言えるのです。人間関係はギブアンドテ



「営業の仕事は、まず認知してもらうことが大事」と新たな開拓先として海外にも力を入れている。写真は韓国・ソウルのハナツアー旅行博覧会にて。

イクの世界でもあり、お世話になったらお返しをする。それと同じで、お互いに助け合っている関係を続けられたら、地域の方々の「マイルール意識」が盛り上がっていくのだと思えます。

そして、来ていただいたお客さまには、十分満足してもらいたい、新たな発見や感動をしてもらおう。そうすれば、そのお客さまはリピーターとなり、さらには、周りの人たちにも宣伝してもらえ、可能性が広がります。これがいい循環作用となり、沿線全体の底上げにつながるのだと思えます。

**おれんじ鉄道に入社したきっかけは**

当社の古木こぎ社長は鹿児島島のホテル業界や経済界では知らない人がいないくらい有名な人物ですが、古木社長とはホテル勤務時代にも上司と部下という間柄でした。

当社社長に就任直後の古木社長から「一緒に仕事をしないか」と誘われたことは大変光栄なことでした。それでも、2ヶ月くらいは迷いましたね。前職の会社でも、楽しみながらいろいろ仕掛けている最中だったので相当悩みましたが、最後は自分が持っているもので、精一杯チャレンジしようと思いい、お世話になることにしました。

**最後に鹿児島観光の魅力**

正直言って、入社前はおれんじ鉄道沿線を「何で売り込んでいけばいいのだろう」と思っていました。しかし、この沿線を中心に売り込まなければならぬという立場になり、魅力の一つ一つ探していく中で、まだ知られていないびつくりするほどの魅力がたくさんあることに気づきました。

これは鹿児島全域にも言えると思います。灯台下暗しで、地域の人たちにとっては当たり前になつていても、地域外の人から見たら珍しいものがあると思うんですよ。小さなことでも「これは売り込めないだろう」などと否定的な考えをするのではなく、地域の特徴として、肯定的に考えることが必要です。それだけの潜在的な可能性や魅力が南北600キロの鹿児島県内には眠っていると思います。



3月に企画したグルメツアーは即完売の大人気。「沿線の魅力を存分に体感できる企画を仕掛けていきたい」と川窪さん。写真は出水市の箱崎八幡宮。